

10 違いを知り、違いを尊重し合う（外国人）

5 (ナレーター) 皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、ゴリけんがお届けします。

10 福岡市には、令和3年5月末時点でおよそ3万7千人の外国人が暮らしています。外国にルーツを持つ子どもたちも増え、日本語がうまく話せない児童生徒のために日本語教室を設置している小中学校が、市内に15校あります。

15 その一つが、東区の城香中学校です。校区の近くには以前、留学生会館があり、その子どもや孫が学校に通うようになったことから、平成9年に日本語教室が設置されました。

20 その後、留学や結婚、就労などの理由で校区に移住する外国人が増え、その子どもたちの転入が相次ぎます。そこで、日本語教室を「ワールドルーム」と呼ぶようになりました。現在、城香中学校には、中国をはじめ世界9カ国の国々をルーツに持つ生徒が通っています。

ここでは、ルーツの違う生徒たちが同じ教室で学ぶのは当たり前前の風景で、特別視はしません。日本語が分からない転入生に対しては、英語やジェスチャーを使ってコミュニケーションをとりながら、自然にサポートしていきます。

一方、転入生たちは最初、授業内容の違いなどに戸惑うこともありますが、ワールドルームで日本語を覚えながら、学校生活に馴染んでいきます。放送部に入って、日本語での校内放送に挑戦している転入生もいます。

生徒たちが楽しみにしている「城香フェスタ」という行事もあります。世界の国々とながりのあるゲストティーチャーを招いて交流したり、文化や慣習などの違いをクイズ形式で楽しんだりしながら、いろいろな国のことを学んでいます。こうして生徒たちは、お互いの国のことを知り、理解を深めていくのです。

日本語指導担当教員の吉田憲太郎先生は、生徒たちから教えられることが多いと言います。

【吉田先生役】生徒たちは、相手のルーツや肌の色などは関係なく、この人はどういう人か、一人の「人」として見ています。お互いに違いがあるのは、おかしいことでも不思議なことでもない。多様性が自然と根付いているようです。